４　兵庫の鬼瓦

池田　征弘

Ａ　はじめに

兵庫県内での古代の鬼瓦の出土は摂津１か所、播磨19か所、但馬１か所、淡路３か所で、圧倒的に播磨での出土が多い（第１図）[1]。当然ながら寺院跡での出土が多いが、播磨においては５遺跡が駅家跡と考えられている遺跡から出土している点が特徴的である。出土数の多い播磨については文様別に記述し、その他の地域については個別の事例を紹介することとする。なお、図の鬼瓦の個別の番号は一覧表の番号を使用することとする。

Ｂ　播磨の鬼瓦

ⅰ　蓮華文鬼瓦

蓮華文の鬼瓦は加西市（旧賀茂郡）に所在する殿原廃寺で出土している（第２図８－１・２）。文様は単弁八葉蓮華文であり、上辺と側辺に無文の外縁がめぐっている。平面形は上辺が弧状に膨らみ、側辺はほぼ垂直とみられる。文様の中心から反転すると、幅は25cm程度と推定される。裏面は全面に指オサエ痕が顕著で、頂部と側面にはヘラケズリが施されている。創建期の軒丸瓦は子葉をもつ単弁八葉蓮華文と子葉をもたない単弁八葉蓮華文が知られ、周縁は珠文と輻線文を交互に配しているとみられる。７世紀後葉頃と考えられている（菱田 2010）。鬼瓦の蓮華文は子葉をもたない単弁八葉蓮華文に類似している。

ⅱ　珠文鬼瓦

珠文の鬼瓦はたつの市（旧揖保郡）に所在する奥村廃寺で出土している。主文様は円形の剥離痕から径３cm弱の珠文が縦横に配されていたとみられる。上辺及び側辺の外縁に偏行唐草文がヘラ描きされている。唐草文と主文様部との間に沈線による界線のないもの（第２図14－１：奥村廃寺鬼瓦Ａ１類）とあるもの（第２図14－２：奥村廃寺鬼瓦Ａ２類）がある。７世紀末頃とされる創建期の軒平瓦にはヘラ描きの偏行唐草文（奥村廃寺軒平瓦Ａ１・２類）があり、軒平瓦Ａ２類の唐草文の一部に鬼瓦Ａ２類の唐草文と同一の文様がある（今里 1997）。平面形は側辺、下辺と界線の形状から方形と考えられる。色調は青灰色、焼成は堅緻である。

ⅲ　鬼面文鬼瓦

播磨国府系鬼瓦や方形鬼面文鬼瓦など笵により施文された鬼瓦が多くみられ、その他、貼り付けや陰刻により施文された鬼瓦がある。

方形鬼面文鬼瓦　たつの市（旧揖保郡）に所在する奥村廃寺と栗栖廃寺で出土している。栗栖廃寺では昭和29年に住人により畑から３点の鬼瓦が一か所で立て並べた状態で発見されたとされている。出土した鬼瓦は１点が完形で、残りも３／４程度残存している。その後の確認調査により鬼瓦出土地点付近で礫積基壇と考えられる遺構が確認されている。

完形個体の鬼瓦（第２図15－１）は縦34.5cm、横32cmの平面方形で、下辺中央に幅13cm、高さ6.6cmの抉りが入れられている。主文様の鬼面文の上辺側、側辺側と抉りを除く下辺側は凸線による界線により画されている。上辺側と両側辺側の外側に大ぶりの珠文帯が巡っている。側辺側の珠文に比べて上辺側の珠文が大きい。後述する奥村廃寺例では珠文帯の外側にも界線が存在するが、栗栖廃寺出土例では切除されている。目は円形で、口内には上下に歯牙が表されている。鼻は蕨手状の線で表現され、眉や髭の先端も蕨手状に巻いている。眉の横の鋏状の線は角の可能性がある。額の上には三角文が５つ並んでいる。蕨手状の表現や三角文から新羅系の文様と考えられている（山本 1998）。背面はナデが施され、中央に向かってゆるやかに盛り上がっている。３点とも焼成は軟質で、色調は黄灰色である。

奥村廃寺では栗栖廃寺と同笵とみられる鬼瓦が１点出土している（第２図14－３）。右上部分の破片で、先述したとおり珠文帯の外側に界線を有している。背面は平坦で、ナデが施され、側面は界線の少し外側にはみ出る部分を面取り状にケズリ落としている。焼成は硬質で、色調は青灰色である。栗栖廃寺とは調整の細部や焼成状況が異なっている。

栗栖廃寺では珠文帯縁六葉複弁蓮華文軒丸瓦のみ出土しており、奥村廃寺では同笵の珠文帯縁六葉複弁蓮華文軒丸瓦が少数出土している。奥村廃寺では創建期に次ぐ時期の８世紀初頭頃に位置づけられている（今里 1997）。

播磨国府系鬼瓦　播磨国分寺跡をはじめとする古代寺院や駅家遺跡などの官衙遺跡などで出土した複数の共通した型式の軒瓦について「播磨国司の管理統制下に置かれ、その関連施設－寺院や駅家などに供給された」一群の軒瓦（今里 1961）として播磨国府系軒瓦と設定されているが、鬼瓦についても同様に複数の遺跡から出土することから播磨国府系鬼瓦と呼称され、珠文帯をもたないⅠ類と珠文帯をもつⅡ類に分けられている（今里 1992）。

①播磨国府系鬼瓦Ⅰ類　Ⅰ類については基本的な文様構成は同一であるが、細部の異なる資料が近年出土したことから、従前より知られているものをⅠA類、新たに出土したものをⅠB類と呼ぶこととする（兵庫県立考古博物館 2023）。ⅠA類の出土遺跡は多く、落地遺跡（上郡町：野磨駅家推定地）、小犬丸遺跡（たつの市：布勢駅家推定地）、古大内遺跡（加古川市：賀古駅家推定地）などの駅家遺跡や播磨国分寺跡（姫路市）、西条廃寺（加古川市）、野口廃寺（加古川市）などの古代寺院跡で出土し、ⅠB類は辻ヶ内遺跡（上郡町：

高田駅家推定地）でのみ出土している。駅家遺跡での出土が顕著である。

ⅠＡ類は頂部が弧状で、側辺は垂直である。復元高 28.4cm、復元幅 25cm である（第３図 A)。目の周囲に棘状に飛び出した部分があり、口は横に大きく開き上下の歯牙間には舌が表現されている。鼻背と小鼻・鼻根・眉間がそれぞれ盛り上がり、目と眉間に覆いかぶさるように眉が乗り、頭には２連の外側に開く蕨手状の巻き毛が開いている。頬の外側にも蕨手状の巻き毛などで髭が表現されている。鼻孔は棒状の工具で刺突されたものが多く、釘孔は眉間に開けられたもの（第３図４－１、13－５）がある。播磨国分寺出土例（第４図 10－１）は鼻孔・釘孔とも認められない。中央付近の上下方向に大きな笵傷をもつものが多く、笵傷をもたない段階のものは小犬丸遺跡出土の１点（第３図 13－２）のみしか確認できない。抉りは幅 13cm、高さ７cm 程度が瓦笵に対して標準的な大きさとみられるが、幅は 16cm 程度まで広く、高さは 5.5cm 程度まで浅いものがある。瓦当面に糸切り痕が残るもの（第３図４－１・２、13－３、第４図５－１、３－１）が多く、背面にも糸切り痕が確認できるもの（第３図４－２、第４図３－１）もある。糸切りにより切り出された粘土板を素材とし、文様の凹凸の少ないものは瓦笵を上から押し付けたと推測される。第４図 10－１は幅 37cm と瓦笵サイズよりかなり大きい表裏両面に粗いナデを施した粘土板に瓦笵を上から押し付けたとみられ、瓦笵の外縁に沿って細く深い溝を切っている。第３図 13－５は破面での粘土の接合痕が明瞭で、瓦笵上で粘土塊を接合して成形したと考えられる。焼成は比較的軟質のものが多く、硬質で色調が還元色を呈するものは確認していない。

ⅠＢ類（第４図 17－１）は頂部が弧状であるが、側辺はⅠＡ類と比べてやや胴張りである。高 26.9cm、幅 28.0cm で、ⅠＡ類と比べて幅が広く、高さが低い。鬼面文はⅠＡ類と目鼻口などの基本的な文様構成は同一であるが、鼻や頭・顔の横の巻き毛の形状が異なっている。抉りは幅 16.8cm、高さ 7.9cm と大きく、そのため鬼面文の下顎部は表現されていない。下顎が本来表現されていたとするとⅠＡ類と元の笵の状態では同じくらいの高さを持っていた可能性が高い。鼻孔と釘孔は設けられていない。粘土塊の接合部での剥離が顕著で、瓦当面にも接合部が皺状痕跡として残り、口内の表現など文様が不鮮明になった部分がある。焼成は軟質である。

Ⅰ類の鬼面文のモデルは平城宮式鬼瓦と考えられる。棘状に飛び出した目の周囲の表現や鼻の形状、頭や顔の横の巻き毛などが平城宮Ⅳ式と類似し、下顎や口内の舌が表現されているところは平城宮Ⅱ式に類似している。いずれも平城宮瓦編年Ⅱ期（養老５年～天平 17 年（721 ～ 745））に製作が開始されたものとされている（毛利光 1980)。

②播磨国府系鬼瓦Ⅱ類　Ⅱ類は古大内遺跡（加古川市：賀古駅家)、播磨国分寺跡（姫路市)、辻井廃寺（姫路市）などの官衙・寺院遺跡のほか本郷遺跡（姫路市）と兵庫県外の平城京跡（加古川市：賀古駅家推定地）などの駅家遺跡や播磨国分寺跡（姫路市)、西条廃寺（加古川市)、野口廃寺（加古川市）などの古代寺院跡で出土し、ⅠＢ類は辻ヶ内遺跡（上

郡町：高田駅家推定地）でのみ出土している。駅家遺跡での出土が顕著である。

ＩＡ類は頂部が弧状で、側辺は垂直である。復元高 28.4cm、復元幅 25cm である（第３図 A)。目の周囲に棘状に飛び出した部分があり、口は横に大きく開き上下の歯牙間には舌が表現されている。鼻背と小鼻・鼻根・眉間がそれぞれ盛り上がり、目と眉間に覆いかぶさるように眉が乗り、頭には２連の外側に開く蕨手状の巻き毛が開いている。頬の外側にも蕨手状の巻き毛などで髭が表現されている。鼻孔は棒状の工具で刺突されたものが多く、釘孔は眉間に開けられたもの（第３図４－１、13－５）がある。播磨国分寺出土例（第４図 10－１）は鼻孔・釘孔とも認められない。中央付近の上下方向に大きな笵傷をもつものが多く、笵傷をもたない段階のものは小犬丸遺跡出土の１点（第３図 13－２）のみしか確認できない。抉りは幅 13cm、高さ７cm 程度が瓦笵に対して標準的な大きさとみられるが、幅は 16cm 程度まで広く、高さは 5.5cm 程度まで浅いものがある。瓦当面に糸切り痕が残るもの（第３図４－１・２、13－３、第４図５－１、３－１）が多く、背面にも糸切り痕が確認できるもの（第３図４－２、第４図３－１）もある。糸切りにより切り出された粘土板を素材とし、文様の凹凸の少ないものは瓦笵を上から押し付けたと推測される。第４図 10－１は幅 37cm と瓦笵サイズよりかなり大きい表裏両面に粗いナデを施した粘土板に瓦笵を上から押し付けたとみられ、瓦笵の外縁に沿って細く深い溝を切っている。第３図 13－５は破面での粘土の接合痕が明瞭で、瓦笵上で粘土塊を接合して成形したと考えられる。焼成は比較的軟質のものが多く、硬質で色調が還元色を呈するものは確認していない。

ＩＢ類（第４図 17－１）は頂部が弧状であるが、側辺はＩＡ類と比べてやや胴張りである。高 26.9cm、幅 28.0cm で、ＩＡ類と比べて幅が広く、高さが低い。鬼面文はＩＡ類と目鼻口などの基本的な文様構成は同一であるが、鼻や頭・顔の横の巻き毛の形状が異なっている。抉りは幅 16.8cm、高さ 7.9cm と大きく、そのため鬼面文の下顎部は表現されていない。下顎が本来表現されていたとするとＩＡ類と元の笵の状態では同じくらいの高さを持っていた可能性が高い。鼻孔と釘孔は設けられていない。粘土塊の接合部での剥離が顕著で、瓦当面にも接合部が皺状痕跡として残り、口内の表現など文様が不鮮明になった部分がある。焼成は軟質である。

Ｉ類の鬼面文のモデルは平城宮式鬼瓦と考えられる。棘状に飛び出した目の周囲の表現や鼻の形状、頭や顔の横の巻き毛などが平城宮Ⅳ式と類似し、下顎や口内の舌が表現されているところは平城宮Ⅱ式に類似している。いずれも平城宮瓦編年Ⅱ期（養老５年～天平 17 年（721 ～ 745））に製作が開始されたものとされている（毛利光 1980)。

②播磨国府系鬼瓦Ⅱ類　Ⅱ類は古大内遺跡（加古川市：賀古駅家)、播磨国分寺跡（姫路市)、辻井廃寺（姫路市）などの官衙・寺院遺跡のほか本郷遺跡（姫路市）と兵庫県外の平城京破片で文様は板状の本体に粘土塊や粘土紐を貼り付けて表している。目は円形で、鼻は鼻背と小鼻が表現されている。その他、採集品の目と周縁が表現された鬼瓦（９－５）

が知られ、昭和32年度に行われた発掘調査では左目・鼻・角などが表現された鬼瓦（９－１）が出土したとされている。文様は貼り付けで表わされているとみられる。野条廃寺は平安時代初期の播磨国府系瓦の野条式を創建瓦とし、平安時代中期頃までの瓦が出土している（加西市教育委員会 2011）。

陰刻施文の鬼瓦　石守廃寺（加古川市）で出土している。薄い板状の本体に、緩やかに頂部へ向かう弧状の側辺が残る。陰刻により文様を描いている。目は大きめの彫り込みで瞼を表し、その下に黒目もしくは目玉、白目もしくは眼窩を表現した弧線を加えている。目の上には眉毛が表されている。焼成は軟質で、表面には炭素が吸着している。輻線文縁単弁十六葉蓮華文軒丸瓦や重圏文軒丸瓦が出土し、８世紀前葉から９世紀かけての時期が考えられている（今里 1996）。

ⅳ　無文鬼瓦

残存部位に文様が認められない鬼瓦である。石守廃寺（加古川市）と仮称邑美駅家跡と推定されている長坂寺遺跡（明石市）で出土している。

石守廃寺出土例（第６図６－２）は側辺が垂直で高く、下辺の抉りの高さも10cmと高い。抉りの上方には大きな孔が切り込まれている。中央に穿たれた孔と考えると孔の寸法はかなり大きくなり、釘孔とは考え難い。焼成は軟質で、表面には炭素が吸着し、陰刻による鬼瓦と類似している。

仮称邑美駅家跡と推定されている長坂寺遺跡出土例（第６図２－１）は、側辺が垂直で、下辺の抉りは高さ6.5cmである。表裏両面に糸切痕が残る点は、播磨国府系鬼瓦の一部に見られる特徴と同様である。焼成は軟質で、外面に炭素が吸着している。

Ｃ　摂津の鬼瓦

摂津国13郡のうち兵庫県内に位置するのは西部の５郡であるが、鬼瓦出土しているのは菟原郡に所在する芦屋廃寺（芦屋市）のみである。

芦屋廃寺　採集されている鬼瓦は重圏文鬼瓦である。側辺側に３重の凸線を配し、側辺外周と下辺の凸線は太く高い。難波宮出土の重圏文鬼瓦と同じ文様構成とみられ、３重凸線の幅からみると難波宮6922型式のサイズに近く、難波宮での小型品に相当する大きさである（八木 1995）。芦屋廃寺では法隆寺式系の軒瓦や藤原宮式系の軒瓦が出土しているが、次いで重圏文系の軒瓦が採用されるに際して重圏文系の鬼瓦が採用されたと考えられる（大脇 2015）。

D　但馬の鬼瓦

但馬地域で鬼瓦が出土しているのは気多郡に所在する但馬国分寺跡（豊岡市）のみである。

但馬国分寺跡　発掘調査で出土した目付近と鼻部分の２点と古くに採集された口付近の１点が知られる。目付近の破片（第７図 20 － １）は頂辺が弧状で、周縁の内側に珠文帯を持ち、鬼面文とは界線で画されている。半球形に突出したとみられる目玉は剥離し、目の周囲に貼り付け時のナデの痕跡が認められる。幅は 35cm 程度と復元できる。焼成は軟質で、色調は外面が灰白色、断面が灰黒色である。鼻部分（第７図 20 － 2）は本体から剥離した破片で、ヘラ状工具で整えられた塊状の鼻尖・小鼻部に鼻背が付き、大きな鼻孔が穿たれている。焼成は部分よりは硬質で、口付近の破片（第７図 20 － ３）は側辺が垂直で、目付近の破片と同様な珠文帯と界線を持っている。口は横に開き、上顎は歯と牙を表し、下端の三角の部分は下顎の牙を表している可能性がある。抉りの高さは８cm 程度である。珠文帯など起伏の少ない文様は笵による成形とみられるが、目・鼻など突出する部分は後で貼り付けられていると思われる。文様はかなり表現が簡素になっているが、珠文帯をもち目・鼻が突出する点から南都七大寺式の系統に属するとみられ、胎土や色調が軒丸瓦（Ｉａ・Ｉｂ）と似ていることから８世紀中葉～末の時期が与えられている（前岡 2011）。

E　淡路の鬼瓦

淡路地域では三原郡に所在する淡路国分寺跡（南あわじ市）、国分遺跡（南あわじ市）、安住寺廃寺（南あわじ市）の３遺跡で鬼瓦が出土している。

淡路国分寺跡　陰刻による施文の鬼面文鬼瓦と無文の鬼瓦が出土している。陰刻による施文の鬼瓦（第７図 21 － １・３）はヘラ状工具による線描で表されている。第７図 21 － １は鼻尖と小鼻を強調した鼻と口角を上げた口が、第７図 21 － ２は目が描かれている。無文の鬼瓦（第７図 21 － ２）は頂部が弧状を呈するとみられ、断面三角のわずかに高い周縁の内側はＶ字状の凹線で画されている。中心付近には比較的大きな孔が開けられているようである。表面のナデ調整は丁寧である。淡路国分寺跡の軒丸瓦・軒平瓦は紀伊国分寺跡より瓦笵のみがもたらされて生産が開始されたことが明らかである（菱田 1993）。しかしながら、紀伊国分寺跡で採用されている南都七大寺式系の鬼瓦は採用されなかったようである（丹野 2021）。

国分遺跡　陰刻による鬼面文の鬼瓦（第７図 22 － １）が出土している。側辺側に毛状の表現がなされていると思われる。国分遺跡は淡路国分寺跡の西に隣接する遺跡で、範囲内には播磨国分寺瓦窯跡が存在する。鬼瓦は瓦窯跡の西約 50 ｍの地点で出土したものである。

安住寺廃寺　手彫りによる鬼面文鬼瓦（第７図 23 － １）が出土している。安住寺境内の東

側での確認調査で出土したものである。安住寺は淡路西国16番札所の真言宗の寺院であるが、中世以前にさかのぼる創建などに関する由来は伝わっていない。鬼面の文様は頬が高く隆起し、眼窩は深く窪んでいる。口は口角部が皺状に盛り上がり、上顎の歯が表現されている。口の横には線状のヘラ描きで髭が表されている。背面は平坦で、抉りの高さは10cmである。平安時代前中期頃と考えられる単弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土している。

（兵庫県立考古博物館）

謝辞

資料調査にあたり、下記の各機関や方々にご協力いただきました。記して感謝申し上げます。

芦屋市教育委員会、小野市教育委員会、加古川市教育委員会、加西市教育委員会、たつの市立龍野歴史文化資料館、たつの市立埋蔵文化財センター、豊岡市立歴史博物館、姫路市埋蔵文化財センター、南あわじ市埋蔵文化財調査事務所、岩井顕彦、岡本一馬、小川真理子、神所尚輝、岸本道昭、坂口弘貢、中川　猛、仲田周平、白谷朋世、森山由香里、山下大輝、山中リュウ、山本原也

註

１　今回は東播系須恵器の生産窯などで出土する平安後期の鬼瓦については取り扱っていない。

参考文献

今里幾次 1961『辻井遺跡』古代播磨研究会
今里幾次 1996「石守廃寺」『加古川市史』第４巻資料編Ⅰ　加古川市
今里幾次 1997「龍野市奥村廃寺の古瓦」『奥村廃寺－調査の概要と出土瓦の研究－』龍野市教育委員会
今里幾次 2010「辻井廃寺」『姫路市史』第７巻下 資料編考古　姫路市
大脇　潔 2015「瓦からみた西摂の古代寺院」『地域研究いたみ』第 44 号　伊丹市役所
小野市教育委員会 2005『国史跡広渡廃寺跡発掘調査報告書』
加西市教育委員会 2011『野条廃寺跡－平成 20・21 年度国庫補助事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』
丹野　拓 2022「和歌山の鬼瓦」『鴟尾・鬼瓦の展開Ⅱ－鬼瓦－発表要旨』　奈良文化財研究所
原田憲二郎 2013「平城京内における播磨産瓦出土の背景について」『帝塚山大学考古学研究所研究報告ＸＶ』
原田憲二郎・永野智子・大原瞳 2020「平城京跡（左京五条四坊八坪）の調査　第 649 次・第 701 次」『奈良市埋蔵文化財調査年報　平成 29 年度（2017）年度』　奈良市教育委員会
菱田哲郎 1993「淡路国分寺創建瓦について」『淡路国分寺』
菱田哲郎 2010「殿原廃寺 」『加西市史』第７巻 資料編１ 考古　加西市
前岡孝彰 2011「但馬国分寺跡出土の鬼瓦」『但馬国府・国分寺館年報』第５号
毛利光俊彦 1980「日本古代の鬼面文鬼瓦－八世紀を中心にして」『研究論集Ⅵ』　奈良国立文化財研究所
八木久栄 1995「後期難波宮大極殿の屋瓦」『難波宮址の研究』第十　大阪市文化財協会
山本忠尚 1998『鬼瓦　日本の美術№391』　至文堂

図版出典

第１図：筆者作成。

第２図８－１：立花　聡・菱田哲郎 1985「殿原廃寺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報昭和 57 年度』。８－２：加西市教育委員会 1993『殿原廃寺（第４次）－市立泉小学校改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－』、断面図は筆者実測。14 － １～３：龍野市教育委員会 1997『奥村廃寺－調査の概要と出土瓦の研究－』。15 － １：新宮町史編集室 1965『播磨新宮町史』第２巻。

第３図Ａ：今里幾次 1992「龍野市小犬丸遺跡出土の古瓦」『布施駅家跡』龍野市教育委員会、今里幾次 1996「賀

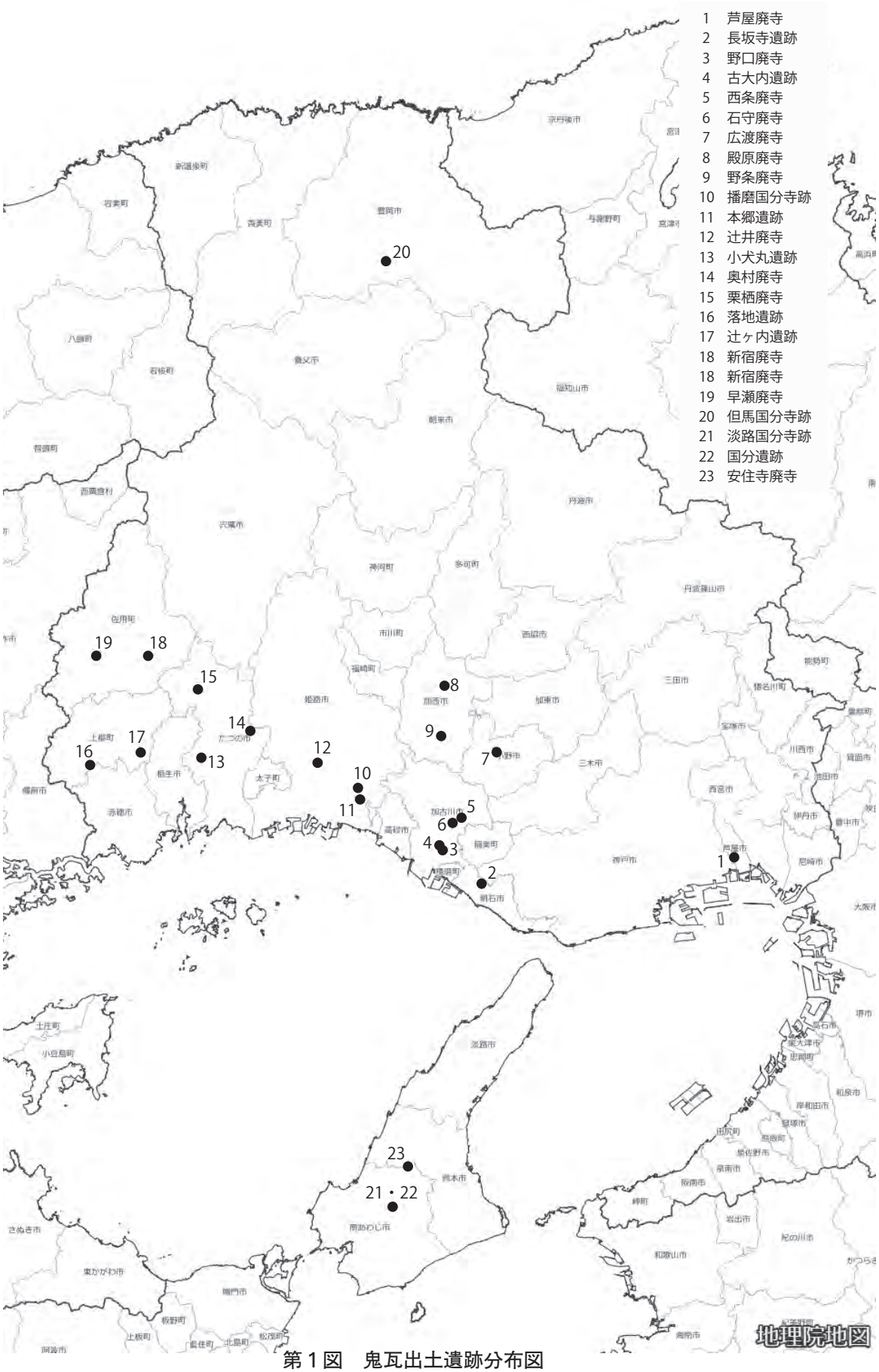
古駅家跡（古大内遺跡）」『加古川市史』（第４巻 資料編Ⅰ）加古川市。４－１：今里幾次 1996「賀古駅家跡（古大内遺跡）」『加古川市史』（第４巻 資料編Ⅰ）加古川市。４－２・３：兵庫県立考古博物館 2010『兵庫県古代官道関連遺跡調査報告書Ⅰ』兵庫県教育委員会。13－１～３：兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1987『小犬丸遺跡Ⅰ』。13－４・５：龍野市教育委員会 1992『布施駅家－小犬丸遺跡 1990・1991 年度発掘調査概報』。16－１～３：上郡町教育委員会 2006『古代山陽道野磨駅家跡』。

第４図３－１：井内　潔 1975「加古川市野口町野口廃寺」『井内古文化研究室報 13』。５－１：今里幾次 1996「西条廃寺」『加古川市史』（第４巻 資料編Ⅰ）加古川市。10－１：山本和子・今里幾次 2010「播磨国分僧寺跡」『姫路市史』（第７巻下 資料編 考古）姫路市、断面図は筆者実測。17－１・２：兵庫県立考古博物館 2023『兵庫県古代官道関連遺跡調査報告書Ⅴ』兵庫県教育委員会。

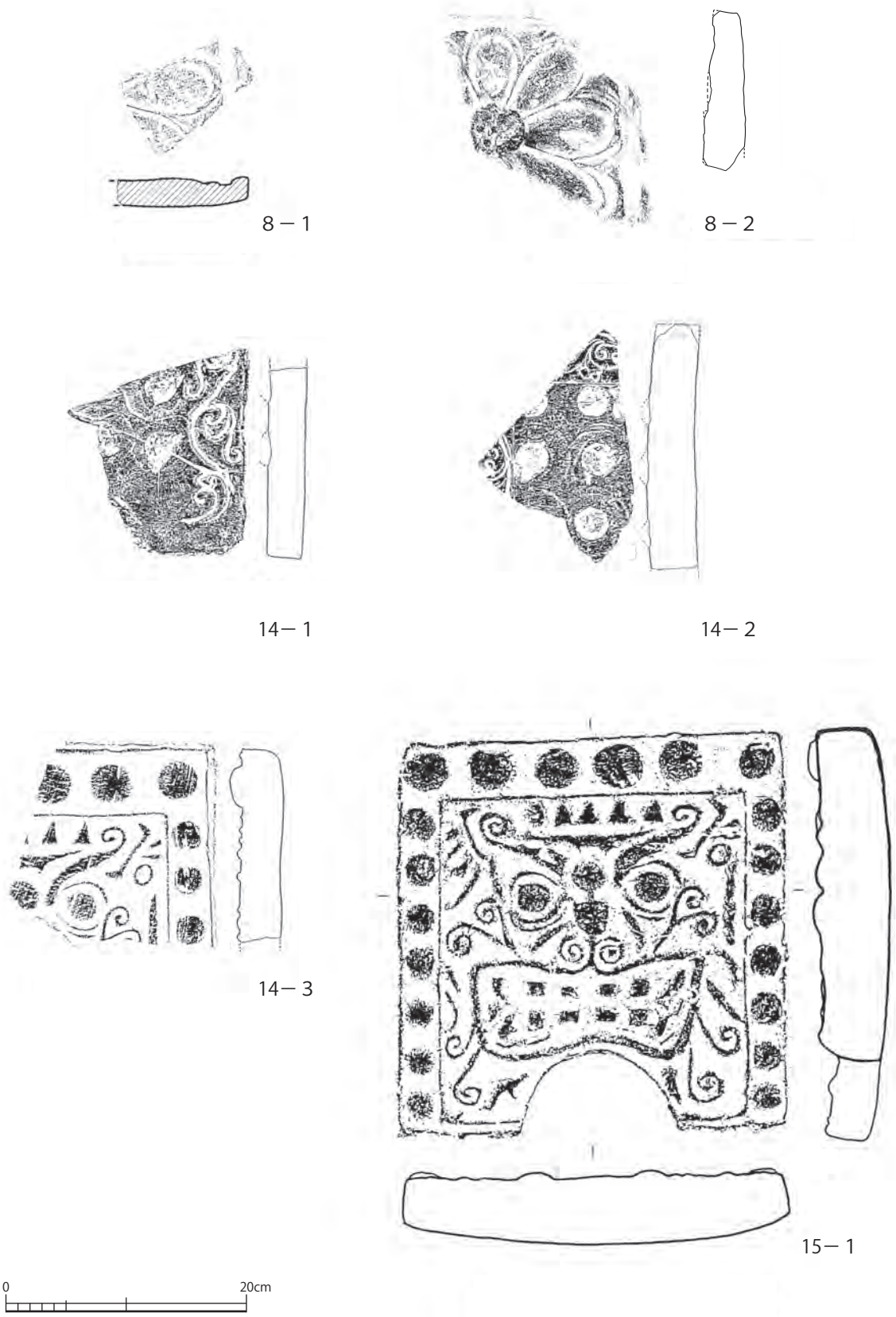
第５図Ｂ：原田 2013、山本和子・今里幾次 2010「播磨国分僧寺跡」『姫路市史』（第７巻下 資料編 考古））姫路市、山本博利 1992「辻井廃寺跡」『兵庫県史』（考古資料編）兵庫県。Ｃ：原田ほか 2020。４－２：今里幾次 1996「賀古駅家跡（古大内遺跡）」『加古川市史』（第４巻 資料編Ⅰ）加古川市。10－２：山本和子・今里幾次 2010「播磨国分僧寺跡」『姫路市史』（第７巻下 資料編 考古））姫路市、断面図は筆者実測。11－１：今里幾次 2010「本郷遺跡」『姫路市史』（第７巻下 資料編 考古）姫路市。12－１：山本博利 1992「辻井廃寺跡」『兵庫県史』（考古資料編）兵庫県。

第６図１－１：筆者実測。２－１：兵庫県立考古博物館 2013『兵庫県古代官道関連遺跡調査報告書Ⅱ』兵庫県教育委員会。６－１：加古川市教育委員会 2011『石守廃寺発掘調査概要報告書』。６－２：６－１に一部加筆。７－１：小野市教育委員会 2005『国史跡広渡廃寺跡発掘調査報告書』。９－２～４：宮本郁雄 1990「播磨の古瓦－赤松啓介氏採集品より－」『神戸市立博物館研究紀要』第７号。

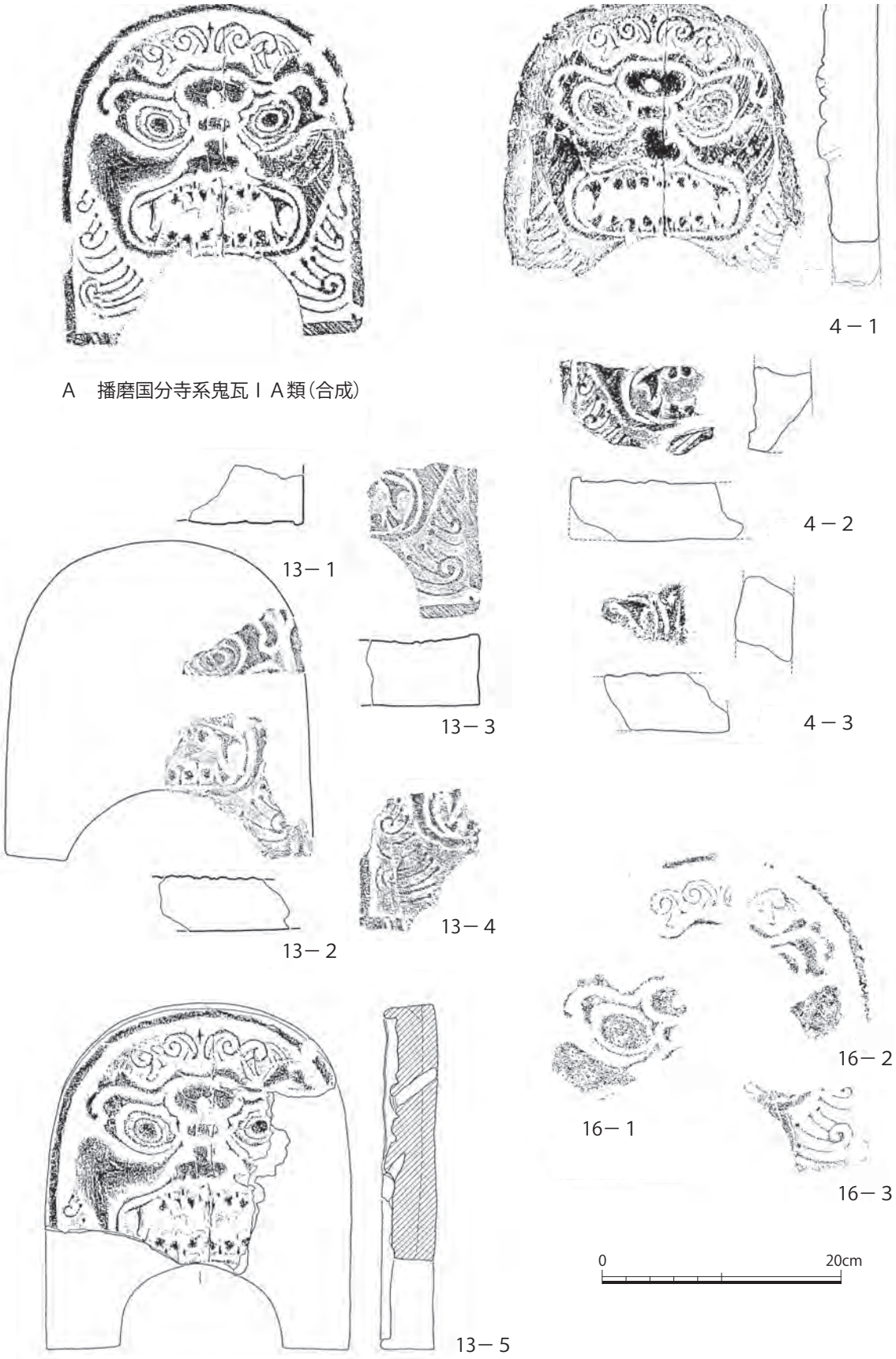
第７図 20－１・２：断面図は筆者実測。20－３：前岡 2011。21－１：三原町教育委員会 1993『淡路国分寺』。21－２：21－１に一部加筆。21－３：坂口弘貢 2011「淡路国分寺跡－ 17 次調査－」『南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅳ』南あわじ市教育委員会。22－１：山崎裕司 2011「国分遺跡」『南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』南あわじ市教育委員会。23－１：筆者実測。



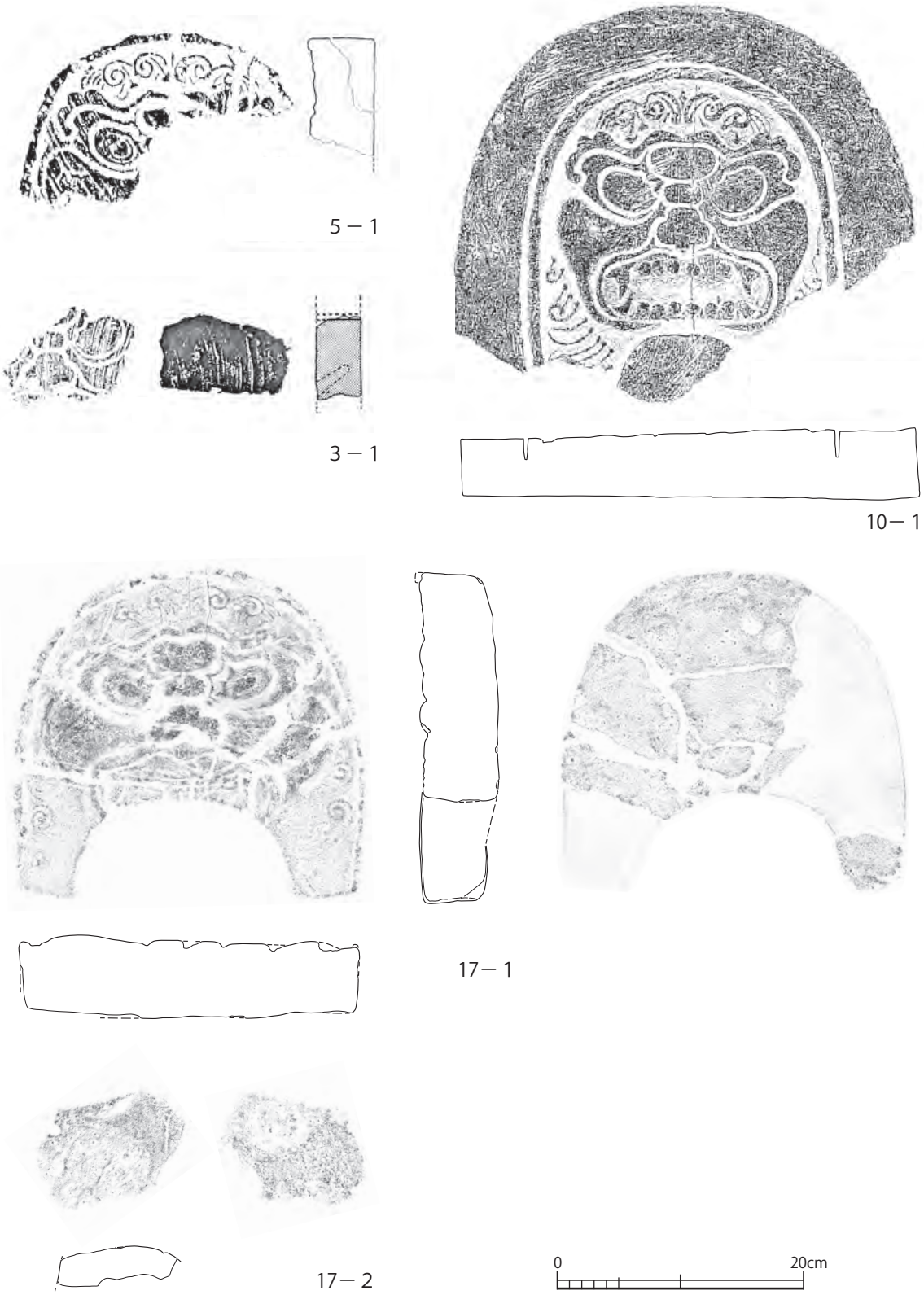
第１図　鬼瓦出土遺跡分布図



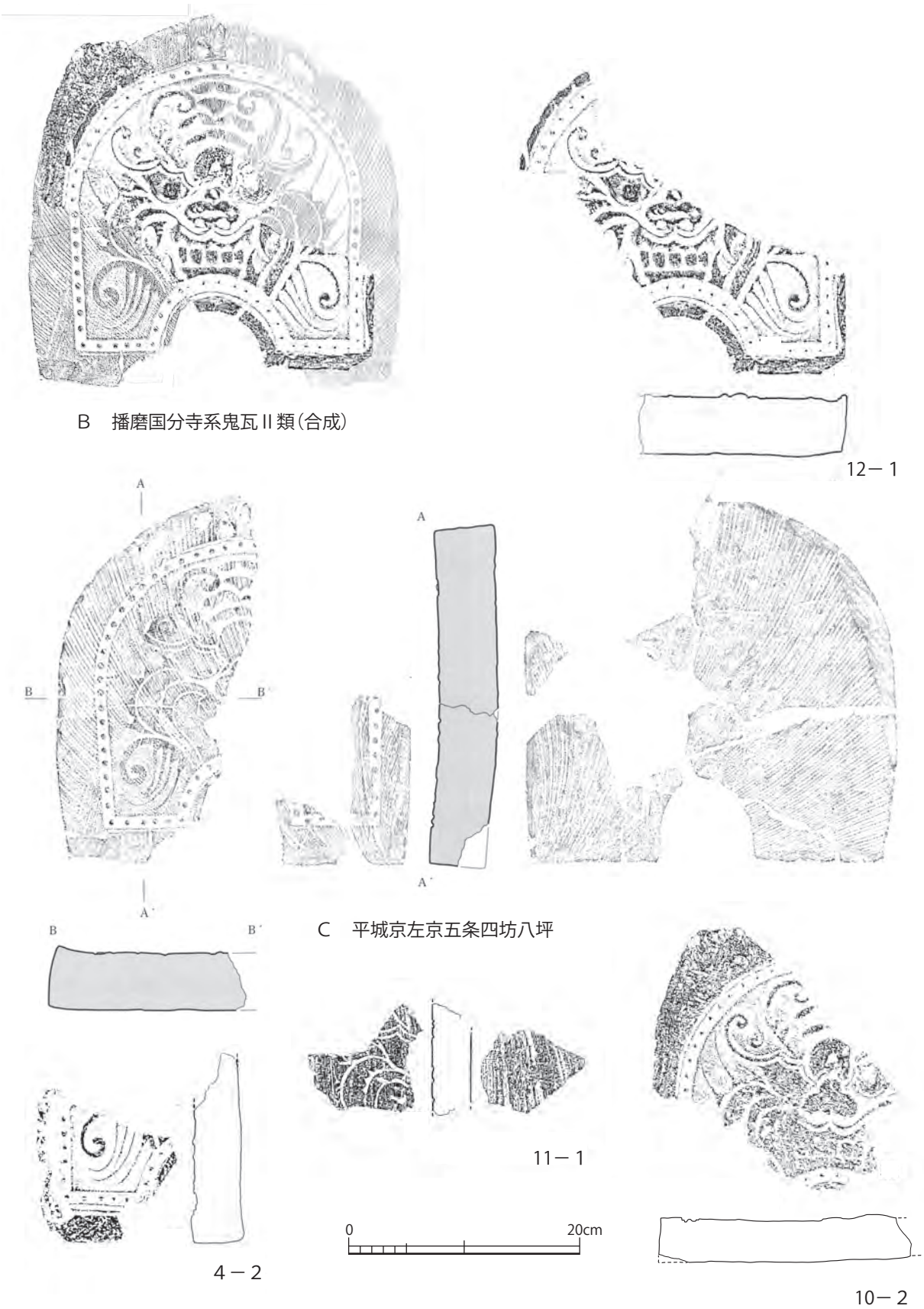
第２図　播磨の鬼瓦（１）蓮華文・珠文・鬼面文（１：５）
（８：殿原廃寺、14：奥村廃寺、15：栗栖廃寺）



第３図　播磨の鬼瓦（２）鬼面文（１：５）
（4：古大内遺跡、13：小犬丸遺跡、16：落地遺跡）

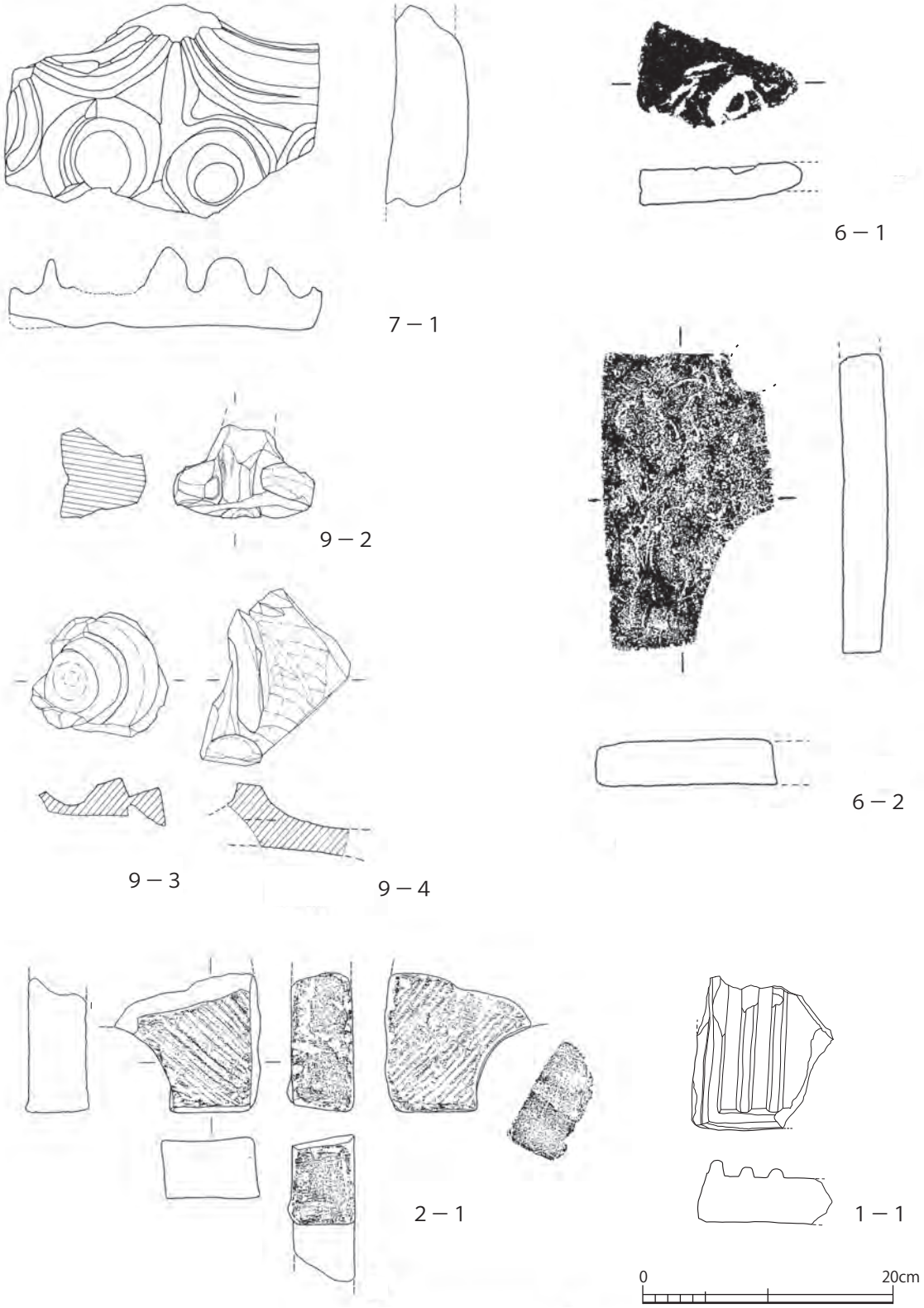


第４図　播磨の鬼瓦（３）鬼面文（１：５）
（３：野口廃寺、５：西条廃寺、17：辻ヶ内遺跡）

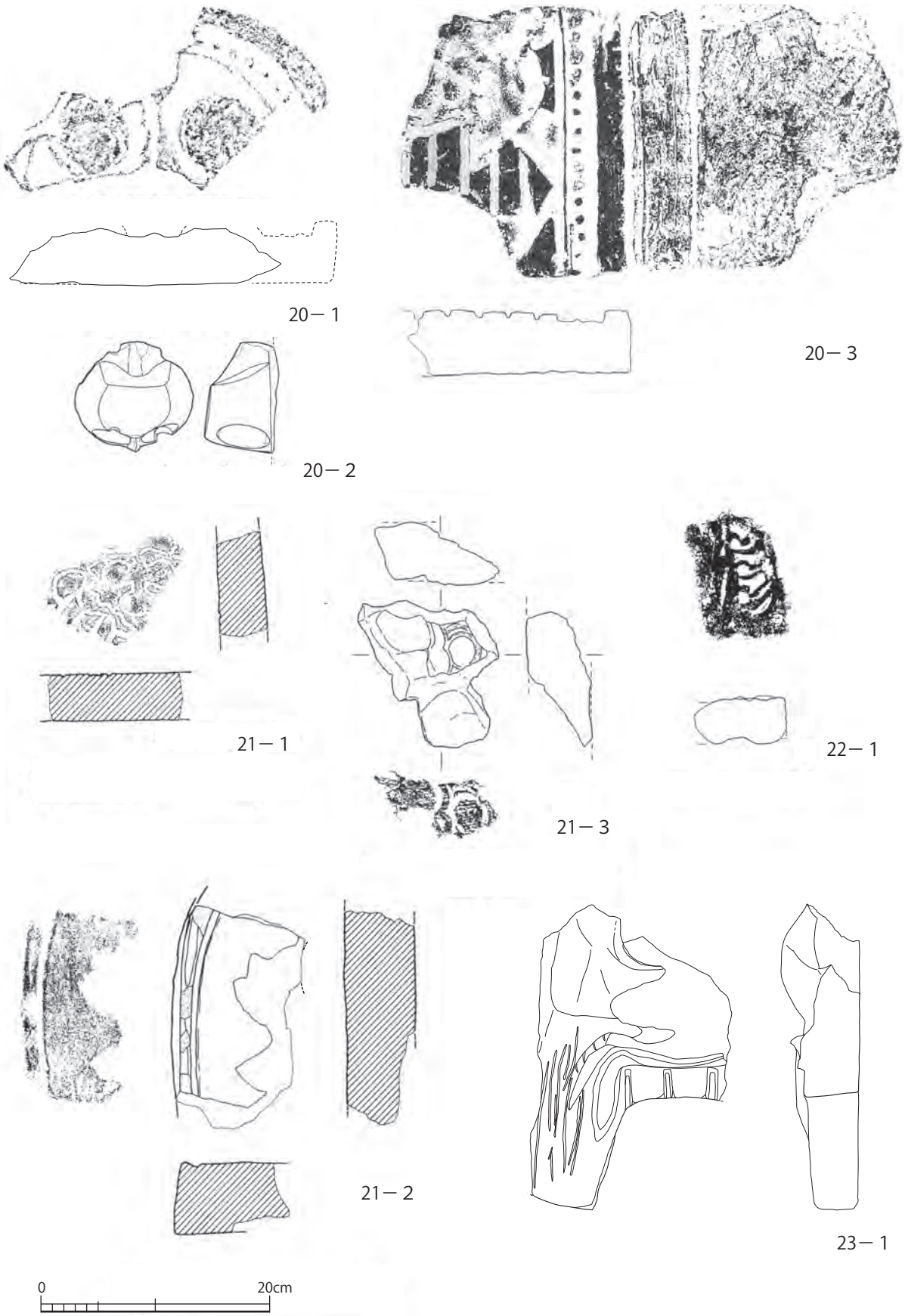


第５図　播磨の鬼瓦（４）鬼面文（１：５）

（5：古大内遺跡、10：播磨国分寺跡、11：本郷遺跡、12：辻井廃寺）



第６図　播磨の鬼瓦（４）鬼面文・無文、摂津の鬼瓦（１：５）
（1：芦屋廃寺、2：長坂寺遺跡、6：石守廃寺、7：広渡廃寺、8：野条廃寺）



第７図　但馬・淡路の鬼瓦（１：５）

（20：但馬国分寺跡、21：淡路国分寺跡、22：国分遺跡、23：安住寺廃寺）